



私が小学校に入学する直前に、父は生まれてすぐのシェパードの雑種の犬を貰って来た。母は動物をケダモノとっていて、嫌なのに、餌係にさせられた。食糧難が続いていたから、一体何を食べさせたのだろう。私が可愛がり係になった。賢そうな顔をしていて、大きくはならなかった。私はマリと命名し、「マリ、マリ」と呼びつけ、命令しては、庭で遊び、あちこちについてきてもらった。大人しく、私の言うことを聞いてくれた。この時から犬好きになった。首輪は付けていたが、リードはつけていなかったような気がする。吠えることもなく、忠犬で、近隣の村の伝道地に父について行った。母は生真面目、清潔好きで、運動嫌いだったから、子どもたちに禁止事項が多かったが、父は仕事第一。子どもとしては、野放しにされて、自由奔放に生きられたと思う。

父は、昼は書齋で勉強、夜は集会で出かけ、日曜日は礼拝があったので、多忙な日々であった。夕方、突然、「さあ、総天然色を見に行こう」と言うことがあった。子どもたちは映画と勘違いして喜んで、飛び出した。ところが、行先は町の方向ではなく、町はずれの岩木川の土手だった。川向うの岩木山、夕日、緑一面の野を眺め、それが、総天然色だと言うのだ。なんと騙されても、私たちは父の散歩「総天然色」について行ったものだった。

父は戸外の遊びでは夏は水泳、冬はスキーに連れ出してくれた。泳げなかった私を背中に載せて泳いだり、浮輪をさせて飛び込み台まで連れ出す。浮輪が一つしかないから、弟のために持ち帰る。恐怖感で震えながら飛び込み台にしがみついていたのが忘れられない。冬になると大鰐スキー場に連れて行ってくれた。自分のスキー板の前に私を立たせ、一緒に山から滑る。リフトで登っては、何度か一緒に滑った。これも怖かった。滑り方を教えるわけではないので、そのうち私も弟も勝手にスキーを履いて滑った。

トランプ遊びでは、ナポレオンに似た津軽独特の「役」というゲームがあった。父は相手が子供でも容赦せず、勝とうとする。この癖が私に遺伝してしまった。その他にも簡単なボード・ゲームがあり、中でもダイヤモンド・ゲームは駆け引きがなく、上品で母好みだった。母がいつも強かった。よく遊んでもらった。父は麻雀も好きで、夜、集会の後に麻雀を始めると終わるまで止められなくなっらしい。集会がメインか、麻雀がメインかと、反省し、麻雀を捨てたと聞いている。

五所川原の鶴常書店が今週で閉店すると報道され、残念に思う。その書店で父はよく本を買った。本屋にはよく付いて行った。月極で購入していた世界少年少女文学全集があるので、他にはあまり買ってはもらえないが、鶴常書店の本の山の陰で、誰にも何も言われず、色々眺めては、立ち読みするのが楽しかった。たまに夜、寝る前に布団と一緒に入り、グリムやアンデルセンの童話を読んでくれた。本が友だちという感じになったのも父のせいかもしれない。父は子どもの相手をする暇はなかったが、楽しめる時間ができると、まず本人が楽しんで夢中になり、それに、私たち子どもが付き合うという形になったと思う。父がいなかったので、父親がどういう風に子どもに接すればいいのか、知らなかった、申し訳ないによく父は残念がっていたのを思い出す。